☆解説（怪説!?）小倉 百人一首 ☆

〔やみくもに暗記するより意味をおさえたほうが速く覚えられる!!〕

１　秋の田の　かりほの庵(いほ)の　苫(とま)をあらみ
　　わが衣手(ころもで)は　つゆにぬれつつ

ｂｙ天智天皇

〔あきのたの　かりほのいおの　とまをあらみ　わがころもでは　つゆにぬれつつ〕

【解説】「庵」というのは秋の収穫の時に作った仮の小屋で、今で言う「バラック」だと思いなさいな。「苫（とま）」というのは菅（すげ）なんかで編んで屋根に用いたもの。ああ、「菅」がわからないか。「菅」とは水のあたりに生える草で、茎が三角形で葉が細長い植物なのだ。でもってこの歌は「苫の隙間からもれてくる夜露のせいで私の着物の袖がしきりに濡れてしょうがない」という意味なのだ。だからどうした、と言われてもそういう歌だからしかたなかろう。

２　春すぎて　夏来にけらし　白妙(しろたへ)の
　　衣ほすてふ　天の香具山

ｂｙ持統天皇

〔はるすぎて　なつきにけらし　しろたえの　ころもほすちょう　あまのかぐやま〕

【解説】これは衣替えの時の歌である。なんだかよくわからないけど、昔の人は衣替えの時に、今まで着ていた服とかこれからの季節に着る服を山で蒸し干ししたのだそうだ。そしてこの歌を詠んだ持統さん（なれなれしいぜ）は離れたところから山を見ていて、そしたらちょうど衣替えの季節で緑の山にたくさんの白い着物が干されていて、「うおっ、感動だ。もう衣替えの季節なのだ。夏が来たのだ!!」と興奮し、思わず歌を詠んでしまったのだよ。ちなみに私（鈴野）はこの歌の意味を知った時、同じ国語科のある女性の先生に、「ああ、まるで寮生が冬になると寮の窓のところに牛乳置いたりゼリー作る（その頃は寮生用の冷蔵庫がなかった）のを見て、我々が『うおっ、感動だ。もう冬が来たのだ!!』と思うのと同じですね。」と言ったら、その通りですね。ほほほ…」と笑ってらっしゃった。

３　あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の
　　ながながし夜を　ひとりかも寝む

ｂｙ柿本人麻呂

〔あしびきの　やまどりのおの　しだりおの　ながながしよを　ひとりかもねん〕

【解説】「あしびきの」は「山」に掛かる枕詞（まくらことば）。枕詞というのは、たとえば「あしびきの」とくれば、必ず次に「山」とくるように、セットで決まっていることば。「山鳥」はキジの一種でやたら尾が長い。「まるで山鳥の尾のように長い夜に、俺は今日もまた一人でわびしく寝るのか…ふふふ、せつないぜ」というような意味だと思えばよろしい。

４　田子の浦に　うち出て見れば　白妙(しろたへ)の
　　富士の高嶺(たかね)に　雪は降りつつ

ｂｙ山部赤人

〔たごのうらに　うちいでてみれば　しろたえの　ふじのたかねに　ゆきはふりつつ〕

【解説】「田子の浦」は静岡にある浜。そこからは富士山がものすごくきれいに見える。山部さんがその田子の浦に行って富士山を見たところ、豪快なその山に雪が降り続いているのを見て、「ぬおおおおっ、な、なんて美しいのだ!!　これは歌にしなけばいかん。」と思って詠んだにちがいない。昔は写真なんてないから、何らかの形で感動を残そうと思ったらすぐに歌を詠んだのです。

５　奥山に　紅葉(もみぢ)ふみわけ　鳴く鹿の
　　声聞くときぞ　秋はかなしき

ｂｙ猿丸太夫

〔おくやまに　もみじふみわけ　なくしかの　こえきくときぞ　あきはかなしき〕

【解説】これはもうわびしさの極致（きょくち）ですな。ようするに人のいない山奥で、鹿が紅葉を踏み踏み鳴いていて、それを聞いているうちに秋が身に染みて悲しい気持ちになったわけである。しかも「声聞くときぞ」の「ぞ」は今の日本語の「～だぞ」の「ぞ」と同じで「強調」するときに使う「ぞ」であるから、よっぽど悲しくなったに違いない。それにしても何が楽しくて人のいない山奥にわざわざわびしさを味わいに行かねばならないのだろう、この猿丸さんは…。

６　かささぎの　渡せる橋に　おく霜の
　　白きを見れば　夜ぞ更(ふ)けにける

ｂｙ中納言家持

〔かささぎの　わたせるはしに　おくしもの　しろきをみれば　よぞふけにける〕

【解説】「かささぎ」というのはカラス科の鳥（カラスよりきれい）で、七夕の日に天の川に橋をかける鳥と言われているのである。この歌で、なぜ空の橋に霜ができると言っているのかというと、天の川は空の川で、そして空は高いところ。ちょうどそれは宮中のように立派なすばらしい場所、という意味でつまり宮中の庭園にある橋をあらわす比喩なのである。その橋に霜が下りているのを見てこの人は、「ああ、すっかり夜も更けてしまったのだなあ。」としみじみとし、昔の人の癖でついつい歌を詠んでしまった、とこういうわけなのだよ。

７　天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも
ｂｙ安倍仲麿

〔あまのはら　ふりさけみれば　かすがなる　みかさのやまに　いでしつきかも〕

【解説】この安倍仲麿という人は当時中国に留学していた。そしてそろそろ帰りたいなあと思ってもなかなか帰れなかったところへ偶然日本から遣唐使がやってきた。そして「うむっ、やっと帰れるわい。でも唐の国を遠のくにも（うまいシャレだ）なごり惜しい。帰る前にみんなで一杯やっていこう！」ということで別れの宴会をしていたら、大空はるかにきれいな月が出ていたのである。その月が遠く故郷日本で見た、奈良の春日の三笠山にかかった月のイメージとダブったので、「この月は、あの故郷の月と同じかも…」と、ほろ酔い気分になりながらもこの歌を詠んだのである。にくいねえ。

８　わが庵は　都のたつみ　しかぞすむ
世をうぢ山と　人はいふなり
ｂｙ喜撰法師

〔わがいおは　みやこのたつみ　しかぞすむ　よをうじやまと　ひとはいうなり〕

【解説】「たつみ」は「辰巳」で、方角を十二支で分けたときの東南にあたる。「しかぞ住む」の「しか」は「かくかくしかじか」の「しか」と同じで「このように」という意味だ。「世をうぢ山」のところにはなんと「掛詞（かけことば）」という超ハイレベルなシャレが使われている。１つは京都の宇治山（うじやま）で、もう１つは「世をうし（憂し）」、つまり「世の中をイヤに思う」という意味である。訳はどうなるかというと、「私の住む小屋は都の東南にあり、このようにとっても静かにゆうゆうと暮らしている。だけどみんなは、私が世の中をイヤに思ってこの宇治山に隠れ住んでいると言ってるのだそうだ。まったくもう…。」という感じだろう。なんだか無理に強がっているような風にもとれないこともないような気がしないでもない。（―――　どっちやろ？）

９　花の色は　うつりにけりな　いたづらに
わが身よにふる　ながめせしまに
ｂｙ小野小町

〔はなのいろは　うつりにけりな　いたずらに　わがみよにふる　ながめせしまに〕

【解説】この歌は掛詞のオンパレードだ。まず「花の色」は「桜の花の色」の他に「自分の容姿・容貌の美しさ」を表している。また、「ふる」は「歳月を経る」と「雨が降る」を同時に表し、更に「ながめ」が「長雨」と「眺め（ぼんやりしてもの思いにふけること）」を同時にあらわしているという、言葉遊びの骨頂のような歌である。したがって歌の意味はどうなるかというと、「桜の花はすっかり色あせてしまったなあ。降り続く長雨にどうすることもなく過ごしていた間に…」という表面的な事柄と同時に、「（その花と同じように）むなしい恋の思いに明け暮れてぼんやりと物思いにふけっているうちに、すっかり私の美しい容貌も衰えてしまったなあ。」というすごい内容を表しているのである。それにしても自分で自分を美人だと思っていたのだからよっぽど美人だったに違いない。でへへ。

１０　これやこの　行くも帰るも　別れては
知るも知らぬも　逢坂の関
ｂｙ　蝉丸

〔これやこの　ゆくもかえるも　わかれては　しるもしらぬも　おうさかのせき〕

【解説】「これやこの」は「これがなんとまあ」という意味。「行くも帰るも」は「これから行く人も、もう帰る人も」の意味で、「知るも知らぬも」は「知ってる人も知らない人も」の意味。「逢坂の関」というのは今の京都と滋賀の国境にあった関所。関所ではこれから東国に行く人や都に帰って来た人が、また知り合い同士知らない人同士が出会うから、まさに「逢う坂」ですね、という掛詞がはいっているのである。そりゃそうだけど①の歌と同様、「だから何なんだ？」と言いたなってしまう。まあ昔は交通網が今みたいには発達していなかったわけだから、きっと１つの場所でいろんな人が行き来するというのがとても珍しくて、それぞれがそれぞれの人生を背負ってこの関所を通る、ということにこの蝉丸さんは感動をおぼえたのだと思う。たぶんね。

１１　わたの原　八十島かけて　こぎいでぬと
人には告げよ　あまのつり舟
ｂｙ　参議　篁

〔わたのはら　やそしまかけて　こぎいでぬと　ひとにはつげよ　あまのつりぶね〕

【解説】「わたの原」とは、「大きな海」のことで、「八十島」とはそこに浮かぶたくさんの小さな島々を指す。834年、副遣唐使に選ばれた小野篁（おののたかむら）さんは、正遣唐使の藤原常嗣（つねつぐ）氏に、「俺の舟、ボロッちいから君のと交換してくれよ」と頼まれた。だが、「いやだい！いやだい！交換なんかしたくないやい！」とダダをこねたため、島流しの刑になってしまった。この歌は、島流しされたとき、その舟の中で詠んだもの。「人」というのは都に残した自分の最愛の人。「あま」というのは海で働く漁夫たちだ。「私がこの大海の中を、たくさんの島々を横目に見ながら流されていったのだと、都にいる私の恋人に伝えておくれ、漁夫（の釣り舟）たちよ。」という歌である。しかし、ダダをこねただけで島流しというのもあんまりだ。

１２　天つ風　雲のかよひ路　吹きとぢよ
をとめの姿　しばしとどめむ
ｂｙ　僧正遍昭

〔あまつかぜ　くものかよいじ　ふきとじよ　おとめのすがた　しばしととめん〕

【解説】教室で百人一首をしているとき、この歌を読み上げるとみんなすごい勢いで飛びついていく。情景が浮かんで鮮やかなところが人気のある所以であろう。その昔天武天皇がお出かけした際、天女が空から降りてきて、天皇の弾く琴に合わせて舞（まい）を舞っ

た――― という伝説がある。それからというもの、毎年収穫の祭の翌日に５人の舞姫が踊りを踊るという習慣ができた。これは、その習慣と伝説とをうまくミックスさせた歌である。「天の風よ、雲間の道を吹いて閉ざしてくれ。（天上へ帰ろうとする）乙女たちの姿を、もうしばらく地上にとどめておきたいのだ。」という意味だ。

１３　筑波嶺の　峰より落つる　みなの川
　　恋ぞつもりて　淵となりぬる
ｂｙ　陽成院

〔つくばねの　みねよりおつる　みなのがわ　こいぞつもりて　ふちとなりぬる〕

【解説】これは身近な歌ですよー。「筑波嶺」とはもちろん筑波山。その峰から落ちてくる「みなの川」は漢字で書くと「男女川」。御存知のとおり筑波山は男体山と女体山の二つの峰からできている。その間を流れているから「男女川」なのだが、これは早い話あの、筑波山キャンプで通った桜川（チェックポイント「栄利橋」）のことなのだよ。地元のお酒にも「男女川」というのがあるしね。「桜川も（初めはわずかな水でしかなかったのが）つもりつもって深い淵となっている。私の恋心もつもる思いが重なって淵のように深～くなってしまった。」という歌である。みんなが「チョー疲れた！」などと言いながら何気なく渡っていた川にも、実はこんな風情があったのですねえ…。

１４　陸奥の　しのぶもぢずり　誰ゆゑに
　　乱れそめにし　我ならなくに
ｂｙ　河原左大臣

〔みちのくの　しのぶもじずり　たれゆえに　みだれそめにし　われならなくに〕

【解説】「陸奥」は東北地方のこと。「しのぶ」は今の福島県福島市で、当時は「信夫（しのぶ）の里」と呼ばれていた。そこで作っていた名産品に「しのぶもぢずり」という、忍ぶ草を染料として染めた布があったらしい。「乱れそめにし」の「そめ」が掛詞（かけことば）になっており、「染め」と「初め（そめ）」の両方の意味を表している。「～我ならなくに」は「～という自分ではないのに…」という意味である。直訳すれば、「東北の信夫の里の名産品“しのぶもぢずり”の乱れた染め模様のように、誰が原因で（心が）乱れはじめてしまった自分ではないのになあ…。」となるが、いまいち何だか分からないので分かりやすく訳すと「東北の、信夫の里の名産品“しのぶもぢずり”。あの布の模様は乱れるように染められていますが、私も心を奪われ、ついに乱れはじめました。それは誰のせい？　もちろんそれは、あ・な・た❤」とでもいった感じになりましょう。

１５　君がため　春の野に出でて　若菜摘む
　　わが衣手に　雪は降りつつ
ｂｙ　光孝天皇

〔きみがため　はるののにいでて　わかなつむ　わがころもでに　ゆきはふりつつ〕

【解説】言葉をいちいち解説しなくともだいたい意味のつかめる歌であろう。「いとしい君に贈るために、早春の野に出て若菜を摘んでいる、そんな私の袖に雪がちらちら降っています。」というきれいな歌である。皇族ともあろう人が、わざわざ自ら野原に出て行って雑草を摘んだか、という疑問は残るが、それが事実かどうかなどはさして重要ではなく、詠まれた歌の状況を想像して風情を楽しむことが大切なのだろう。春まだ浅く、なごり雪の降る広い野原の美しい風景である。

１６　立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる
　　松とし聞かば　今かへり来む
ｂｙ　中納言行平

〔たちわかれ　いなばのやまの　みねにおうる　まつとしきかば　いまかえりこん〕

【解説】作者中納言行平が、因幡の守（いなばのかみ）として都を離れ単身赴任する際、お別れの宴会で詠んだ、と言われている歌である。山の名前になると「いなば」は「稲葉」となるらしい。また、この言葉は「往なば」（行くにしても）との掛詞にもなっている。掛詞と言えばもう一つ、「松」は「待つ」の意も含んでいてこの「松」―　「待つ」の掛詞は、昔の歌ではしょっちゅう使われたので覚えておこう。「お別れです。私は因幡の国に行くにしても、稲葉山に生える『松』という言葉の音のように私を『待つ』人がいてくれると聞いたら、私はすぐにでも帰って来ましょう。」という意味である。宴会で詠んだのだから、特定の女性にあてた歌ではないらしいが、いずれにしても楽しい都を離れて一人で遠い所へ行って仕事をするのは、やっぱりいやだったんだろうな。

１７　ちはやぶる　神代も聞かず　竜田川
　　からくれなゐに　水くくるとは
ｂｙ　在原業平朝臣

〔ちはやぶる　かみよもきかず　たつたがわ　からくれないに　みずくくるとは〕

【解説】「ちはやぶる」のような語は枕詞（まくらことば）といって、必ずあとに「神」という言葉がくると決まっているもの。もともとは「勢いの強い」という意味があったらしいが、枕詞になってしまうとそれ自体の意味はほとんどなくなってしまう。とにかく「ちはやぶる」とくれば「神」だな、と連想するのが歌の常識なのだそうだ。「神代」とは「神様の時代」のことで、伝説ではものすごい奇蹟が起こりまくっていたと言われていた。「竜田川」は奈良県にある、紅葉（もみじ）が綺麗で有名な川である。「からくれなゐ」の「から」は「唐」、つまり中国。中国産の紅（くれない）は非常に美しい。「水くくる」というのは「水をくくり染めにする」という意味だそうで、布を染める時にその布を絞りながらそめることを「くくり染め」といったらしい。全体の意味としては、「（奇蹟が起こりまくっていたという）神の時代にも（こんな事があったとは）聞いたことがない。この竜田川で、唐紅（のような素晴らしい色）に水を絞り染めにしているとは！」―――　といった感じになろう。川面を流れる紅葉の葉があまりに美しくて詠んだ歌である。

ちなみに古典落語にも『千早ふる』という噺（はなし）がある。この同じ歌をご隠居さんがとんでもない解釈をし、間抜けな八つぁんが真に受けるという噺である。興味のある人にはくわしく教えてさしあげます。

１８　住の江の　岸に寄る波　よるさへや
　　夢の通ひ路　人目よくらむ
ｂｙ　藤原敏行朝臣

〔すみのえの　きしによるなみ　よるさえや　ゆめのかよいじ　ひとめよくらん〕

【解説】「住の江」は住之江、現在大阪市住吉区の海岸である。「よるさへや」の「よる」は掛詞で、前の句を受けて「波が寄る」の意味と、「夜」の意味を表す。「夢の通い路」とは、夢の中で恋人に逢うために通る道のこと。昔は「通い婚」と言って、常に男の人の方から女の人の方に通って会いに行くという決まりがあった。さらに昔は、「夢の中に好きな人が出てくると両思いだ」と考えられていた。「人目よくらむ」の「よく」は「よける」、つまり「避ける」こと。「らむ」は「～だろう」という意味の助動詞である。全体を解釈すると、「住之江の岸に寄る波――　寄るといえば『夜』であるが、そんな夜の夢で見る通い道でさえも、どうしてあの人は人目を避けようとするのだろう。」ってな感じかな。夜なんだから人目を気にせず、僕と堂々と会ってくれたっていいのに……という気持ちが込められている。ところで心理学者の人たちの話によれば、「夢」というのは現実の世界でかなえられない欲求をかなえようとして見るものだそうだ。とすれば、「夢の中に好きな人が出てくる」のは、むしろ片思いの時の方が多いんじゃないかなあ、と思うのだが…。みなさんは、どうですか？

１９　難波潟　みじかき芦の　ふしの間も
　　あはでこの世を　過ぐしてよとや
ｂｙ　伊勢

〔なにわがた　みじかきあしの　ふしのまも　あわでこのよを　すぐしてよとや〕

【解説】「難波潟」とは、大阪付近の海辺のこと。そこに生えている芦（「葦」とも書く）の歌。芦の、節（ふし）と節の間の長さは短い。「あはで」とは「逢わないで」「逢わずに」の意。「この世」の「世」には、単に「世の中」という意味だけでなく、「男女の仲」という意味も含まれている。また、「節」のことを「よ」とも言うので、掛詞にもなっている。ところで、作者「伊勢」は女性であるから、これは恋人に逢えない切ない女心を歌っていると言えよう。「難波潟に生えている芦の、節と節の間のように短い時間でさえも、あなたにお逢いせずにこの世を過ごせというの？　（あんまりだわ）」という意味になる。

ところで、古語の「あう」（正確には「あふ」）の意味は、ただ単に「会う」だけではないのだぞ。〔それについては中３以降で学習します。〕

２０　わびぬれば　今はたおなじ　難波なる
　　みをつくしても　逢はむとぞ思ふ
ｂｙ　元良親王

〔わびぬれば　いまはたおなじ　なにわなる　みをつくしても　あわんとぞおもう〕
［ha］

【解説】「わびぬれば」は、つらい思いをして、悩んでいること。この歌の出典（出どころ）は後撰集（ごせんしゅう）という歌集で、そこにこの歌の説明書きがあり、秘めた恋がばれたとき、相手に送った歌だということがわかる。「今」というのは、「不倫が人々にばれてしまった、そんな今」という意味の「今」である。「はた」というのは、「また」の意。「難波なる」は「難波にある」つまり「大阪の海にある」という意味だ。その「難波なる」を受けて「みをつくし」とくるのだが、「みをつくし」とは漢字で「澪標」と書く。女優の沢口靖子さん❤がデビューしたＮＨＫ朝の連続ドラマも同じ題名だが、これは何かというと船の進路を示すために海中にうたれた杭（くい）のことである。そしてまた、掛詞にもなっていて、「身を尽くしても」つまり「身を捨てても、滅ぼしても」の意味がある。「逢はむ」は「逢おう」。「ぞ」は今では「～だぞ。」というふうに文の終わりに付くが、昔は文の途中について強調をあらわした。というわけで、この歌は不倫がばれて半分ヤケになりながらも、その恋を貫こうとするすごい気合の入った歌なのである。「（どうせ）辛い思いをしてきたのだから、不倫のことがばれた今もまた辛いのは同じ。難波の海にある澪標ではないが、こうなった以上、身を尽くしてもあなたに逢おうと思うのだ！」――　ってな感じかな。すごいよね。

２１　今来むと　いひしばかりに　長月の
　　有明の月を　待ち出でつるかな
ｂｙ　素性法師

〔いまこんと　いいしばかりに　ながつきの　ありあけのつきを　まちいでつるかな〕

【解説】「来む」は「来よう」の意。「いひし」は「言ひし」で、「し」は過去を表す助動詞。「ばかりに」は、今でも例えば「僕がうそをついたばかりに、大変なことなってしまった。」などの時に使う「ばかりに」と同じ。「長月」は旧暦の９月を指す。「有明の月」は夜が明けてもまだ残っている月。「月を――待ち出で」とあるが、実際に月を待っていたのかというと、そうじゃない。「今来よう」と言ってくれた恋人を待っていたのである。ついついその言葉を信じて、すっかり期待してしまって一晩中ずーっと待っていた結果、ついに朝になってしまったんですねえ。ところで作者・素性法師は男であるが、この歌は女性の気持ちになって歌ったものである。例えばさだまさしの『雨やどり』（キャンプファイヤーの教員の出し物のときバックに流れていた歌）など、今も昔も男性が話者を女性と想定して作った歌はたくさんあるのだ。渡辺美里などは逆に「僕」の歌が多い。歌の意味を通すと、「『今すぐ来よう』とあなたが言ってくれたばっかりに、（ついつい期待していた結果）９月の、明け方の月を待っていたのと同じことにってしまったのだわ…」となる。

２２　吹くからに　秋の草木の　しをるれば
　　むべ山風を　あらしといふらむ
ｂｙ　文屋康秀

〔ふくからに　やまのくさきの　しおるれば　むべやまかぜを　あらしといううらん〕

【解説】「吹くからに」は「吹くとすぐに」。「しをるれば」は「しおれるので」とか「枯れるので」ということ。「むべ」は「なるほど」。「吹くとすぐに秋の草木がしおれてしまうので、なるほど、山風のことを嵐（荒らし）というのだろう。」という意味の歌である。なるほどと感心してはいるけど、もともと木々を荒らすから「あらし」というようになったんだろうし、だからその言葉に中国の漢字である「嵐」をあてたんだろうから、いまさら感心することもないと思うんだけどなあ…。どう思う？

２３　月みれば　ちぢに物こそ　かなしけれ
　　わが身ひとつの　秋にはあらねど
ｂｙ　大江千里

〔つきみれば　ちぢにものこそ　かなしけれ　わがみひとつの　あきにはあらねど〕

【解説】作者は「♪かっこわるーい振られかーた」でお馴染みの大江千里（せんり）さんではなく、大江千里（おおえのちさと）さんである。これはとってもせつない歌だ。「ちぢに」とは「千々に」と書き、「いろいろに」「さまざまに」といったような意味。また、この「千々に」は４句めの「ひとつの」と数字の上で対照的な効果を出している。「月を見ていると、さまざまにもの悲しい。私ひとりだけの秋ではないのだけれど―――。」という歌。秋の月だから、空気も澄んで、煌煌（こうこう）としていたのか、あるいは逆にぼんやりして綺麗なのかもしれないな。いずれにしても、夕焼けとか、そういう美しい物を見ていると、かえって悲しいというかセンチメンタルになることってあるよね。いわゆる、「たそがれちゃってる状態」だ。

２４　このたびは　ぬさもとりあへず　手向山
　　もみぢのにしき　神のまにまに
ｂｙ　菅　家

〔このたびは　ぬさもとりあえず　たむけやま　もみじのにしき　かみのまにまに〕

【解説】作者の菅家（かんけ）とは、あの有名な菅原道真さんである。彼がまだ太宰府に流される前に、奈良で詠んだ歌。掛詞が３か所も使われている。まず「このたび」は、「今度」という意味と、「この旅」の意味を表す。「とりあへず」はいわゆる今の「とりあえず」と同じ意味が一つと、「取るひまもなく」の意味を表す。「手向山」は固有名詞で奈良にある山の名前だが、同時に「ぬさ」（＝神様にお供えする物・捧げ物）を「手向け」る、と言う意味を表す。全体を通して訳すと、「今度の旅は、お供え物も用意できず出発しました。手向山の神様、とりあえず紅葉の錦を用意しましたので御心（みこころ）のままにお受けとり下さい。」となる。お供えを忘れたときに、機転をきかせて紅葉を捧げるなんて、粋（いき）だね。

２５　名にし負はば　逢坂山の　さねかづら
　　人に知られで　くるよしもがな
ｂｙ　三条右大臣

〔なにしおわば　おうさかやまの　さねかずら　ひとにしられで　くるよしもがな〕

【解説】「名にし」の「し」は強調。「名に負はば」というのは、「そういう名を持っているのならば」と言うこと。「逢坂山」とは、今の京都府と滋賀県の国境にあった山。この山の名はよくいろんな歌に出てくる。このように、和歌でよく使われる有名な地名（海・山・川等も含む）の事を歌枕（うたまくら）というので覚えておいてくださいな。そして、「逢ふ」という言葉と掛詞になっている。「さねかづら」は秋に丸い実をつける植物で、じつは「さ寝」（共に寝ること）との掛詞。つまりけっこうなまなましい歌なのだよ。その次の「人に知られで」というのは「人に知られずに」「ばれないように」といった意味。「くる」は「来る」と（かづらを手で）「繰る」との、これまた掛詞だ。「よし」というのは漢字では「由」と書き、「方法」の意味。「もがな」は願望表現で、「～があったらなあ…」という意味である。全体としては、「逢坂山のさねかづらが、その名の通り『逢う』とか『さ寝』の意味を持っているのなら、それを手で繰るように、人にばれないように（あなたのところに）来る方法があって欲しいものだなあ。」といった意味になろう。けっこうきわどい内容も、昔の人は歌という形で美しく昇華してしまったのだから、すごいと思う。

２６　小倉山　峰のもみぢ葉　こころあらば
　　今ひとたびの　みゆき待たなむ
ｂｙ　貞信公

〔おぐらやま　みねのもみじば　こころあらば　いまひとたびの　みゆきまたなん〕

【解説】貞信公の本名は藤原忠平。宇多上皇という人のお供をしていた。そして二人で一緒に小倉山（京都にある。有名な嵐山の向かい側。）に行ったさい、あまりにももみじが美しいので「ああ、美しいな。わが子にもぜひ見せてやりたいよー。」とおっしゃった。「みゆき」と言うのは「行幸」と書き、これは天皇があちこちに行くことである。その天皇というのが、宇多上皇の息子で、醍醐天皇なのである。つまり、お供の貞信公が、上皇のおことばを聞いて同情し、詠んだのが、この歌である。「小倉山の峰のもみじの葉よ。君にも心あるならば、もういちど天皇がいらっしゃるのを待っていておくれ。」というわけである。

２７　みかの原　わきて流るる　いづみ川
　　いつみきとてか　恋しかるらむ
ｂｙ　中納言兼輔

〔みかのはら　わきてながるる　いづみがわ　いつみきとてか　こいしかるらん〕

【解説】歌そのものに意味があるのは後半「いつみきとてか～」以降である。そこで、後半から解説すると、「いつ見た（お逢いした）というわけでもないのに、どうして（あなたが）こんなに恋しいのでしょう。」となる。その「いつ見」のフレーズを誘うために、前に「いづみ川」という川の名前が出されているのである。掛詞とはちょっと違う、似ている言葉を前に持ってきて後の言葉を誘うこの技法を「序詞」（じょことば）と言う。そして「みかの原　わきて流るる」は、ただ単にその「いづみ川」の説明である。「みかの原」は今の京都府山城町あたりだ。「みかの原にわいて流れているいづみ川――　いづみ、と言えばいつ見た、つまりいつあなたにお逢いしたというわけでもないのに、どうしてあなたのことがこんなに恋しいのでしょう。」という歌である。ところで、なんで見たこともない人に恋をするのか。」という素朴な疑問が出てくる。当時は今みたいにアイドルのブロマイドなどないし、ましてやテレビもない。けれど、「かっこいい人」とか「素敵な人」というのは、やはり噂が噂を呼び、有名になったのである。噂を聞いて想像し、見たこともないのにその人に恋をしてしまうということが、日常的だったのだよ。かえって今よりも夢があっていいかもしれない。

２８　山里は　冬ぞさびしさ　まさりける
　　人めも草も　かれぬと思へば
ｂｙ　源宗于朝臣

〔やまざとは　ふゆぞさびしさ　まさりける　ひとめもくさも　かれぬとおもえば〕

【解説】「冬ぞ」の「ぞ」は「～だぞ」の「ぞ」と同じで強調。「まさりける」は「まさっているのだなあ。」の意。「かれぬ」が掛詞で「枯れぬ」と「離れぬ」の両方の漢字をあてることができる。「かれぬ」の「ぬ」は「～ない」の「ぬ」ではなく、「～てしまった」という完了の意味をあらわす。とてもわかりやすい歌である。「山里は（都のほうと違って）冬は寂しさがまさっているなあ（＝強く感じられるなあ）。訪ねてくる人も無くなってしまうし、草も枯れてしまうと思うとなあ。」というわけだ。「山里は」とあるから、頭のなかに「都と違って」という対比があることがよめるのである。あまり関係ないかも知れないけど、君たちがキャンプで通った花室川のあたりからの景色は、畑とか田舎っぽい景色があって突然その向こうに三井ビルやセンタービルなど未来都市のような都会の景色が見えて、すごく不思議な雰囲気がある。

２９　心あてに　折らばや折らむ　初霜の
　　おきまどはせる　白菊の花
ｂｙ　凡河内躬恒

〔こころあてに　あらばやおらん　はつしもの　おきまどわせる　しらぎくのはな〕

【解説】「こころあてに」の「あて」は「あてずっぽう」とか「あてがはずれた」などの「あて」と同じ。「適当に、こんなものだろうという勘で」という意味。「折らばや」の「や」は疑問をあらわす助詞である。「もし折るならば、折れるだろうか？」という訳になる。「おきまどはせる」とは要するに「惑わせる」こと。白菊をとりたいのだが、初霜がおりていて両方白いので保護色になって見えないという、まるで‘消える魔球’の原理のような状況である。「あてずっぽうで、もし折るならば折れるだろうか、初霜がおりて（どれだか区別できないほど）私を惑わせる、そんな白菊の花を。」ってな感じである。お湯をまいて霜を溶かせばよい――　などと言わないで、純粋に歌を味わいましょう。

３０　有明の　つれなく見えし　別れより
　　あかつきばかり　うきものはなし
ｂｙ　壬生忠岑

〔ありあけの　つれなくみえし　わかれより　あかつきばかり　うきものはなし〕

wa

【解説】「有明」とは、有明の月を指す。「有明の月」とは朝になってもまだ空に残っている月のこと。「つれない」とは「無情な」「冷酷な」「そっけない」といった意味。「あかつき」とは「暁」とかき、「明け方」の事である。この歌の解釈には２つの説がある。１つは、「有明の月が（朝を告げて）無情に見えた、あの別れの瞬間からというもの、明け方ぐらい私にとってつらいものはありません。」という解釈。もう１つは、「つれない」のは「有明の月」だけでなく、相手の女の人をもあらわしている、つまり「有明の月が無情だったように、あなたが私に冷酷な態度を示したあの瞬間からというもの、明け方ぐらい私にとってつらいものはありません。」という解釈である。前者の解釈の方が幸せだ。

以上　小倉百人一首より　１～30

●参考文献

・『要解　小倉百人一首』　野地潤家　編／西日本書房
・『カラー版　田辺聖子の小倉百人一首』（上）／角川文庫
・『解説　百人一首』　橋本　武／日栄社